

I これまでの研究について

本校では、「一人一人のニーズに応じた支援の最適化を目指して」という主題のもと、平成17年度から19年度の三カ年を支援の最適化を目指しての「Ⅰ」とし、20年度、21年度の二カ年においては「Ⅱ」、そして22年度から24年度までの三カ年を「Ⅲ」とした、計8年という歳月をかけて研究に取り組んできた。最終年となる24年度は、児童生徒一人一人のニーズを明確にし、学校における指導や関係機関と連携して支援を効果的に行うことができるように、個別的教育支援計画、個別の指導計画、個別移行支援計画、学習指導案の様式の作成及び改善に取り組んだ。ここでは、より児童生徒の実態を分析的に捉えて、細やかな学習指導を行うことを目指し、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」を基本とした観点別に実態把握、目標設定、評価を行えるように様式を作成した。

平成25年度は、研究テーマを新たに「働くための環境設定とシステム作成の試み」と設定し、研究に取り組んだ。ここでは、卒後の生活を見据えた上で、人的環境と物的環境を一人一人の児童生徒に合わせて設定することにより、行動に数値的な変容が現れるかどうかという点に注目した。研究を進めるにあたって、前年度まで本校校長であった松本敏治が本校高等部生徒に対して行った喫茶店業務指導過程を作業マニュアルの側面から分析した研究（「知的障害者への接客指導のためのマニュアル作成の試み」2001）の手続きに基づいた。学部毎に取り上げた指導の形態は、小学部…日常生活の指導（清掃）、中学部…作業学習（販売活動）、高等部…作業学習であった。成果としては、一人一人の児童生徒に応じた環境設定やシステムを体系化する観点をういた指導により、行動評定の数値が上昇することが明らかとなり、有効性が認められた。また、マニュアルや指導内容表をしっかりと作り込むことで、児童生徒は自ら活動しスキルもアップすることが分かった。この中で、自己評価を取り入れている授業もあったが、その部分に力を入れて取り組んでいくことにより、効果的な学習がなされるのではないかという課題が挙げられた。

II 今回の研究について

1 研究主題について

研究主題「授業における自己評価システム構築と環境設定に関する実証的研究」

（1）自己の発達

本校は知的に障害のある児童生徒が学んでいる学校であり、指導や支援を効果的に行うため、一人一人の障害の状況や特性に応じて配慮をしている。学習のプロセスにおいては、メタ認知が大きくかかわっていることが、様々な研究により明らかとされている。知的障害がある児童生徒は、一般的に自分自身を客観的に見ることが苦手とされており、それに伴ってメタ認知の力も十分に育っていないことが多い。

オルポートによると、自己意識は、表1のように7つの側面からなり、順次に発達するとされている。幼児期は、自己同一性の感覚にはじまり、自尊心（自我）の芽生え、そして自己の拡大へと自己意識が発達していく。児童期になると、よりいっそうの自己の拡大とともに理性的な対処者としての自己、そして自己像が発達する時期だとされている。エリクソンは、人間の生涯の発達段階を表2のように8段階にまとめている。この中で、乳児期には信頼感情の醸成から青年期のアイデンティティの確立に向けて、自己の発達に関して非常に重要な時期であるとされている。

知的に障害があることにより、自己の形成については、定型発達の児童生徒と比較して発達の様相に違いがある。そこで、一人一人の児童生徒によって異なっている発達の状態に応じ、課題を設定し指導・支援を行うことにより、より良い形で自己の形成がなされることが考えられる。

表 1

| |
|----------------|
| 自己意識の展開 |
| ①身体的自己 |
| ②自己同一性 |
| ③自尊心 |
| ④自己の拡大 |
| ⑤理性的な対処者としての自己 |
| ⑥自己像 |
| ⑦固有の希求 |

表 2

| 段階 | 時期 | 発達課題 危機 |
|------|------|------------------------|
| I | 乳児期 | 基本的信頼 基本的不信 |
| II | 幼児初期 | 自律 恥，疑惑 |
| III | 遊戯期 | 自主性 罪の意識 |
| IV | 学齢期 | 勤勉 劣等感 |
| V | 青年期 | アイデンティティ アイデンティティ拡散 |
| VI | 若い成人 | 親密 孤立 |
| VII | 成人期 | ジェネラティヴィティ 自己陶醉 |
| VIII | 成熟期 | インテグリティ 嫌悪，絶望 |

(2) 自己評価を研究として取り上げた背景

キャリア教育の重要な視点として、「社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力を明確化する」ということが述べられている。その中の基礎的・汎用的能力の一つとして、「自己理解・自己管理能力」があげられており、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動する力として重要視されている。また、知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」（国立特別支援教育総合研究所）では、4つの能力領域の中の「人間関係形成能力」の領域に、育てたい力として自己理解・他者理解が示されている。

「特別支援学校学習指導要領解説・総則等編（幼稚園・小学部・中学部）」では、「学習の過程の適切な場面で評価を行うことや、教師による評価とともに、児童生徒による相互評価や自己評価などを工夫することも大切である。特に、相互評価や自己評価は、児童生徒自身の学習意欲の向上につながるのと指摘もあることから、重視する必要がある。」と記載されている。また、文部科学省（2010）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」においては、「児童生徒が行う自己評価や相互評価は、児童生徒の学習活動であり、教師が行う評価活動ではないが、児童生徒が自身の良い点や可能性について気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲を高めること等学習の在り方を改善していくことに役立つことから、積極的に取り組んでいくことも重要である。

また、児童生徒の自己評価を学校評価においても反映し、学校運営の改善につなげていくことも考えられる。」と述べられている。

本校の教育活動において、授業と学校目標の関係で考えてみる。授業の中では、教師または児童生徒が目標を設定して授業が展開され、その過程の中でポジティブな自己評価がなされることによって、成就感を感じ取ることができる。そして、児童生徒の自律性・自己肯定感の向上、さらには学習効果の向上につながる。また、自己評価として自分自身に目を向け振り返る活動を繰り返すことにより、適切な自己理解へとつながり、実現可能な自己目標を立てることができるようになる。これらを日々の授業を通してサイクル的に行うことにより、本校の学校目標である、自分の力をしっかりと出し切ることができる児童生徒に育つことが期待できる。

(図 1)

図 1



これらのことから、学習場面において、より学習効果を上げるための自己評価の在り方について検討していくことは、一つの研究として有意義なものであると考えた。

2 研究仮説について

研究仮説「児童生徒が学習場面において、自己評価を行うことにより、適正な行動が増えるであろう。」

(1) 適正な行動とは

仮説の中の「適正な行動が増える」とは、普通学校の評価の観点である「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」等についての向上が見られること、それに加えて、児童生徒が自分自身を振り返る力である自己評価能力の向上も含めて定義した。

(2) 検証の方法

昨年度の研究方法を基本とし、マニュアル、評価チェックリストを作成し、児童生徒の行動を数値化して定量的評価を行う。授業の中に自己評価を取り入れたことによって、どのように児童生徒の行動が変容したのかを量的に見ていく。併せて、数値化できない部分については、エピソードとして継続的に記録することで定性的な評価を行い、質的にも変容を見ていくこととする。教師が評価を行うにあたっては、より評価の妥当性を高めるという観点から、できるかぎり複数の教員によって評価を行うこととする。

授業の中で、児童生徒が自己評価を行いやすい環境を整え、自分の行動について振り返る活動を取り入れることにより、「適正な行動」がどのように変容するかを見ていく。

3 研究の目的

- ・自分のできること、苦手なことを考え、実現可能な自己目標を立て、行動することができる児童生徒を育てる。
- ・授業の中で児童生徒が自己評価をする環境を整えることで、すすんで自分の行動を見直すことができるようにする。
- ・教師による学習評価の妥当性や信頼性を高めることで、授業力アップを図る。

4 研究計画

(1) 研究計画

本研究は、平成26年4月～平成27年7月までの1年4カ月の計画で行う。平成26年度の1年間は、自己評価を授業の中に取り入れることにより、児童生徒の学習状況にどのような効果が現れるのか、教師によって定量的評価と定性的評価を行うことで仮説を検証する。また、国立特別支援教育総合研究所主任研究員の小澤至賢氏を講師として年2回招聘し自己評価に関連した講演や助言をいただきながら研究を進める。

平成27年4月～7月は、1年目研究の成果を積極的に組み込んだ授業研究を中心として行う。7月の公開研究発表会では、成果を公表するとともに参加者との意見交換を通して研究の質を高める機会とする。

(2) 研究の組織

小学部、中学部、高等部の学部毎に授業を選定し、各学部で研究に取り組む。研究を進めるにあたっては、弘前大学教育学部協同実践研究を本研究と関連付け、大学の障害児教育を担当する先生方に参加していただき、各学部で助言や指導を受けることとする。

5 研究の内容

(1) 自己評価及び環境設定について

研究の一環として、国立特別支援教育総合研究所の主任研究員である小澤至賢氏を講師として招聘し、公開研修会を開催した。その中で、評価の意味と目的について、本校としての捉え方を以下のように確認することができた。評価とは、事実を明らかにすることであり、事実を価値判断することと捉えた。そして、評価を行う目的は、意思決定の改善、説明責任を果たすという二つがある。自己評価を行うことに対しては、意思決定の改善が大きな目的になる。自己評価とは何かということであるが、自分の行動について、目標や基準と照らし合わせて、価値判断することと定義した。また、主題にある環境設定とは、児童生徒が自己評価を行いやすいように、人的環境または物的環境を整えることとして定義した。

(2) 評価の側面

評価とは、事実を明らかにすることに加え、その事実を価値判断することである。測定と評価は異なり、測定したものを価値判断したことで評価となる。また、菊地一文(2013)「実践キャリア教育の教科書」によると、評価には次の二つの側面があり、分けて考える必要があると述べられている。

①価値判断としての評価

- ・対象に注目し、理解するという「把握」
- ・価値基準に則して対象を価値付ける
- ・「できる・できない」という指標において測定

②問題解決として(プロセス)の評価

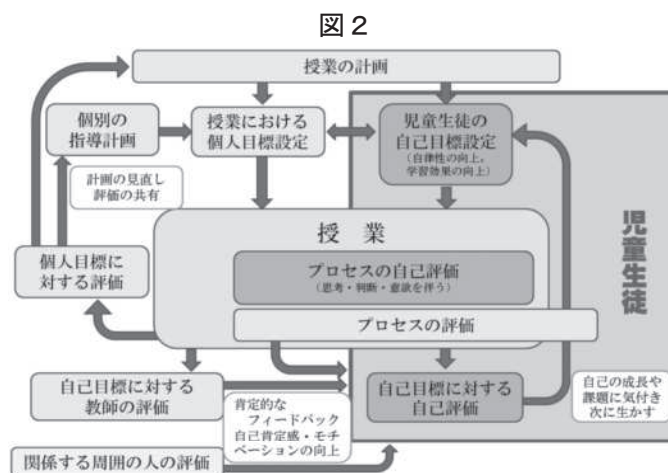
- ・行ったことに関する「判断」
- ・そのことを次にどう活かしたか、どのように取り組もうとしたかという姿勢までを含める。

「評価というものは、ある一定の基準に基づいて、できたかどうかだけではなく、どのようにそこに向かっていったかというプロセスが重要である。プロセスこそが、「できる・できない」だけでなく、知ろうとしたことや、失敗したけどどう向き合ったかという部分も含まれ、丁寧に見ていかなければならない部分である」ということも菊地は述べている。本研究においては、このプロセスの部分はエピソードの記録を行いながら定性的に評価をする。

(3) 児童生徒ならびに教師による目標設定と評価

図2は、児童生徒及び教師にとっての目標設定、評価とはどのようなものをかを整理したものである。

まず、目標の設定についてである。教師は、個別の指導計画や授業の計画を基にして、授業における個人目標を設定する。併せて、児童生徒は自分なりに目標の設定を行う。これにより、児童生徒の自律性が向上し、学習効果の向上が図られることが期待できる。そして、それらの目標を基にして、授業が展開される。



次に評価についてである。児童生徒は自らの目標と照らし合わせながら、授業での取り組みを振り返り自己評価を行う。そして、その評価により自己の成長や今後の課題に気づき、次に活かそうとすることにつながるを考える。

教師側による評価では、児童生徒が立てた自己目標に対する評価を行う。肯定的に児童生徒にフィードバックすることで、自己肯定感やモチベーションの向上を図ることにつながる。また、個人目標に対する評価の結果により、今後の計画の見直しにつなげることができる。そして、教師間で評価の共有を行うことで、児童生徒について学習の状況を共通理解することができ、複数の教員で指導にあたることの多い特別支援学校では特に大切な視点である。

ここまでは、先ほど述べた価値判断としての評価になる。他に問題解決としてのプロセスの評価も大切になる。授業の中で児童生徒は、課題に直面することがある。その場面で、児童生徒が自己に目を向け、自らの行動や思考が正しいかどうかを判断しながら、課題解決に向かっている。それは、児童生徒による授業の中でのプロセスの自己評価ということができる考える。教師は、「できる・できない」だけでなく、どう知ろうとしたか、どう向き合ったかという部分を含めてプロセスの評価を行う。

その他に、外部の評価として関係する周囲の人の評価も考えられる。家族であったり、友達であったり、近所の人からの評価である。例えば、大学祭での販売場面で、作業学習で製作した物や栽培した野菜を売り、購入した方から「商品が立派だね」と褒められることは、子ども達にとってこの上ない意欲の向上につながるものとする。

(4) 小学部から高等部までの自己目標と自己評価について

まずはじめに、自己評価についての研究を行うにあたり、各学部で児童生徒の実態や学部目標及び本校のキャリア教育の内容表を基に、自己目標の設定、自己評価を行うことに関する児童生徒のめざす姿を各学部で検討した。先述したが、知的に障害がある本校の児童生徒にとって、自己意識の発達とは定型発達の児童生徒とは異なり、自己に目を向けることが苦手である。特に小学部の児童等、自己意識が十分に育っていない場合には、目標設定にあたって、教師が目標を設定し本人に伝え、同意してもらい形をとることも考えられる。外発的なものであっても、選択肢を設けるなど工夫をすることで、児童生徒により自己決定していると感じ取ることができれば、それは児童生徒の自己目標と捉えることができる。同じように、自己評価についても、教師から「楽しかったですか」と聞かれて、「はい」と答えるようなことも自己評価の初歩の段階と考えることができる。中学部、高等部と進むに従って、評価を次に活かそうとしたり、課題を自ら見いだしたりすることへと発展し、自己を振り返る力が高まっていくことになる。

表3 学部目標と児童生徒にとっての自己目標・自己評価のとらえ

| | 小学部 | 中学部 | 高等部 |
|-----------------------|--|--|---|
| 学部目標 | 身の回りの物や人との かかわりを広げ、意欲を もって活動する。 | やる気を持ち、仲間 と共に生き生きと活動 する。 | 豊かな生活を目指し、 自分らしさを発揮しな がら生き生きと活動す る。 |
| 自己評価に関する児童 生徒のめざす姿 | (目標設定) ・自分の役割(目標)へ の意識を持ち、教師や 友達と一緒に活動する。 (自己評価) ・称賛を受け、認められ ることで自分の良さや がんばりに気付く。 | (目標設定) ・目標を選択、設定し 達成に向けて取り組 む。 (自己評価) ・活動場面の過程や結 果を振り返り、次に 活かそうとする。 | (目標設定) ・将来設計や進路希望 の実現を目指した目 標の設定とその解決 に向けて取り組む。 (自己評価) ・活動場面を振り返り、 課題を自ら見だし、 次に活かそうとする。 |

【引用・参考文献】

- 1) 石塚謙二 (2011) 知的障害教育における学習評価の方法と実際. ジアース教育新社
- 2) エリクソン (2011) アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房
- 3) 菊地一文 (2013) 実践キャリア教育の教科書. 学研
- 4) 国立特別支援教育総合研究所 (2011) 特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック. ジアース教育新社
- 5) 文部科学省 (2010) 児童生徒の学習評価の在り方について (報告)
- 6) 龍慶昭 佐々木亮 (2004) 「政策評価」の理論と技法. 多賀出版
- 7) 森下正康 (2010) 児童の心理. サイエンス社